

1%の恐れ

道教委は、先日、道内の中高校生を対象に、薬物使用に関する意識調査の結果を明らかにしました。

それによると、「薬物を使ったり、持ったりすることは悪いことだ」という回答は中学生で7割～8割、高校生で6割～7割で、全国の状況と同程度とのことですが、年齢が上がるごとに「悪いこと」という認識が低くなっていくのは問題です。

また、いずれの校種ともに、約9割の生徒が「薬物乱用による罰則」など薬物に関する知識を有すると共に、薬物について「絶対に使うべきでなく、許されることではない」と考えており、高い認識を持っていることが伺われます。

これは、各学校における薬物に関する学習の成果であると考えて良いと思います。しかし一方では、薬物について「気持ちよくなれる」と肯定的な回答をした生徒が、中学生で7%程度、高校生で8%～10%程度あり、このことは危険な兆候だといわざるを得ません。

最近では、インターネットを通じて簡単に色々な情報やモノを手に入れることができるようになりました。中学生や高校生は、そうした情報化社会の申し子といっても良いでしょう。そうしたことが影響しているのかも知れませんが、5割～6割の生徒は「薬物は入手可能だ」と答えています。更に、中学生の約1%、高校生の約2%が、薬物の「購入を勧められたり、使用を誘われた経験がある」と回答しています。

1%、2%という数字は非常に小さいように感じるかも知れませんが、全道の中学生は公私併せて14万人余り、同じく高校生は13万人余りいるのですから、中学生の1千4百人余り、高校生の2千6百人余りが、薬物の仲介役と接点を持った経験があるということにもなるわけで、愕然とする思いです。

今回のアンケート調査の結果、中・高校生について「薬物が悪いものだとい

うことは十分認識している。しかし、気持ち良くなれる気がするので、チャンスがあったら手を出すかも知れない。」というようなイメージが浮かんできますが、この位今の子どもたちは危険な環境に晒されているのだということを、認識しておく必要がありそうです。

薬物に関する授業などに一定の成果が見られますので、各学校においては、今後も引き続き薬物に関する指導の徹底を図っていただきたいと思います。ただ、薬物は危険、違法ということだけでは、子どもたちを薬物から遠ざけることは難しいと思われます。

薬物について「気持ち良くなれる気がする」と肯定的に受け止めている生徒がいますが、薬物で得られる快樂は虚構の世界、幻影であり、現実の世界の方がもっともっと楽しくて、素敵なことが沢山あるということを、大人達が身を以て示していくことが（例え、やせ我慢といわれようと）一番大事なことのよう感じています。（塾頭 吉田 洋一）